車いす体験　基本的な流れ

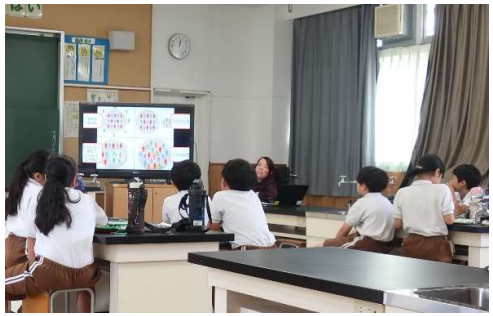
資料②

前日
当日使用する車いすと段差板（4枚または8枚）の借用
返却は先生にご対応いただきます。

※借用先は障がい者福祉会館と豊田市福祉センターです。
※原則、実践教室の前日借用・当日返却をお願いします。
※車いすの台数は児童・生徒2名または3名に1台が基本です。

体験
＜車いすの乗り方説明＞
車いす利用者と介助者が車いすの組み立て方、乗り方、介助の仕方、注意点をお話します。

体験
２人１組または3人１組で車いすに乗る役と介助者に分かれて体験します。
コースを一周したら介助者と交代して全員が体験します。
【コース例】
体育館内、廊下、中庭、体育館の入口などの段差、スロープ、手洗い場で手を洗う



講話
車いすに乗りながらの生活について、車いすに乗っていてもみんなと同じがいいという思い、などの内容の講話をします。
希望の内容と時間を事前に講師と打ち合わせしてください。

振り返り
児童・生徒に感想や気づいたことを発表していただきます。
その意見を基に、体験の振り返りとまとめのお話をします。

点字体験　基本的な流れ

資料②

自助具等を紹介している様子
（写真は点字雑誌を紹介しています）

こんなところにも点字がついているよ
（ガムのパッケージ、ボンド、ジャムの瓶等）

音声色彩判別装置を使って制服の色を
確かめている様子

糸通しをしている様子

講話
講話の内容は先生のご希望に合わせます。希望の内容を打ち合わせ時に講師へお伝えください。

【講話例】普段の生活の話、どのように視覚が不自由になったのか、普段使っている自助具について、意外と気が付かない身近な点字のついたもの、（女性講師の場合）糸通しを見せる、子育ての話、（古家さんの場合）義眼を見せる、色識別装置を使って色を知る

点字の打ち方の説明
やさしさはほっとするやイラストなどを交えて分かりやすく点字の基本と主なルールを説明します。
※やさしさはほっとするや点字器等を、生徒に事前に配布して下さい。

点字体験
簡単な単語（あおいそら等）／自分の名前／学校名／やさしさはほっとするに記載の例文／自分の住所など・・・
低学年の場合、濁音や拗音を使用しない簡単な単語が易しく取り組めます。
学校のご要望に合わせた点字体験を行います。希望の内容を講師にご相談ください。

点字体験
できた点字の文章を講師に読んでもらいます。

盲導犬　基本的な流れ

資料②

自助具等を紹介している様子
（写真は補助犬マークを紹介しています）

生徒が体験コースまで講師を案内している様子

講話
講話の内容は先生のご希望に合わせます。希望の内容を打ち合わせ時に講師へお伝えください。

【講話例】普段の生活の話、どのように視覚が不自由になったのか、普段使っている自助具について、意外と気が付かない身近な点字のついたもの、子育ての話、義眼を見せる、色識別装置を使って色を知る

体験コースの見学
講師と盲導犬が実際に歩く様子を児童・生徒に見てもらいます。
※「盲導犬の見学コース設定について（例）」を参照してください。

【留意点】
・盲導犬には決して触れないように児童・生徒への周知をお願いします。またその他、盲導犬を驚かせるような言動（大声を出す、驚かせる等）を行わないよう、児童・生徒に周知をお願いします。

・児童・生徒で列を作り、すき間なく道を作ってください。すき間があると、盲導犬がコースを外れてしまいます。

・講師の安全を確保するため、体育館の舞台等で使用している可動式の階段はコース設定から外して下さい。

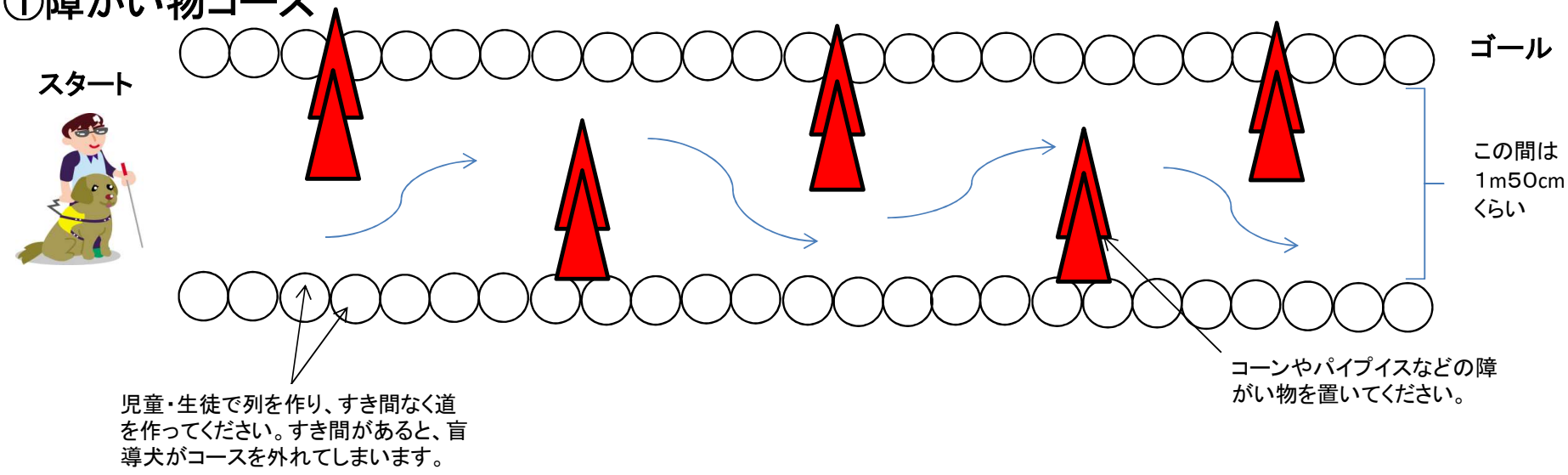
質疑応答・講師との交流
講話・体験コースの見学をうけて、児童・生徒が気になったことを講師に質問します。

【留意点】
児童・生徒がマイクを通じて講師に質問する場合、講師が児童・生徒の方を向いて話を聞くため、まず位置が分かるような発声（「はい」、「ここです」、「質問です」、「〇組の〇〇です」など）をしてください。

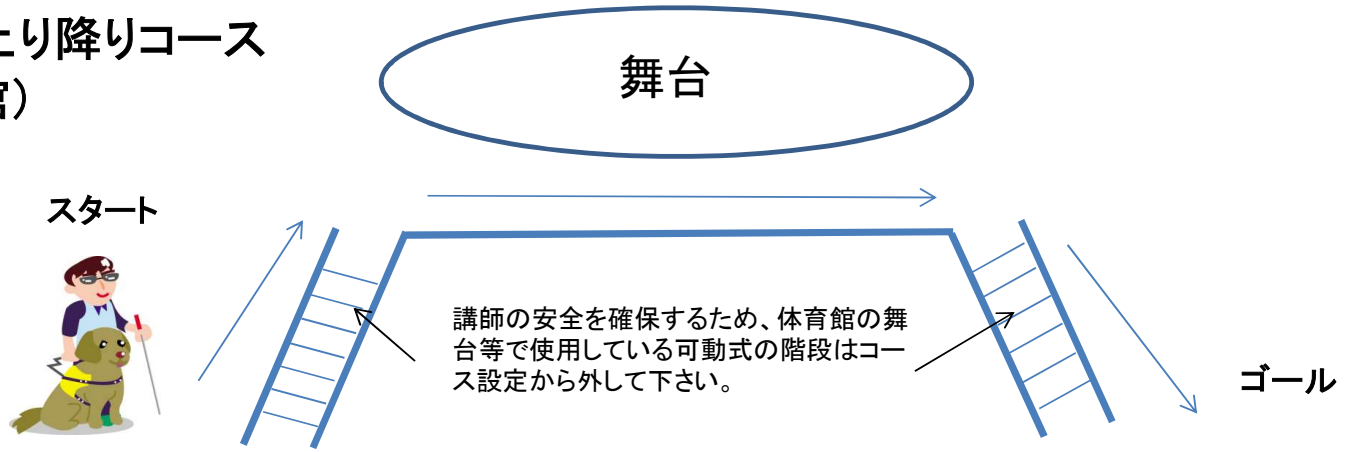
盲導犬の見学コース設定について（例）

資料②

①障がい物コース



②階段の上り降りコース（体育館）



歩行の様子

資料②

体育館

校舎内

アイマスク体験　基本的な流れ

資料②

アイマスク体験までの事前学習
視覚障がいのある方が外出する際に必要となる白杖、盲導犬、ガイドヘルプがどのようなものなのかを学習し、日常生活の中で視覚障がいの方を見かけたら自分は何が出来るのか、生徒が出来ることを意識してみましょう。
学校にある教材やインターネット、冊子「やさしさはほっとする」を使用していただいてもかまいません。

導入
事前学習を踏まえた視覚障がい者についての講話。五感について、見え方の違いや白杖についての説明、障がいの程度は様々であり先天性と後天性があるということ、視覚障がい者の生活などの内容をガイドヘルパーがお話します。

声の聞こえる方向が変わる体験
全員にアイマスクを渡し、装着していただきます。アイマスクを装着した状態で、講師が話をします。始めは生徒の正面に立って話しますが、次第に後ろから話すなど方向を変えて話をします。
音の聞こえる方向が急に変わる体験を通し、視覚障がいの方に対し、どのような声かけが良いかを考える機会になります。

声と指の感覚のみで折り紙を折る体験
講師から声のみで折り方を伝えていきますので、アイマスクを装着した状態で声のみの説明と指の感覚を使い、見えない状態で折り紙を折ります。その後、アイマスクを外し、見える状態で折り紙を折ることで、見えるときとそうでないときの違いや注意点を確認します。

左：色柄音声認識装置を使い、服の色を音声案内している様子
右：音のなるピンポン玉を使い、ゲームをしている様子

自助具体験
講師より視覚障がいのある方向けの自助具を紹介します。その際に、アイマスクを装着した代表の生徒数名に実際に使用していただき、感想などを聞いていきます。視覚に障がいがあっても道具や少しの工夫があれば自分で生活できることに気づきます。

まとめ
街中で視覚障がい者と出会ったら、生徒ができることを説明します。
質問等があればこの時間に伺います。

手話体験　基本的な流れ

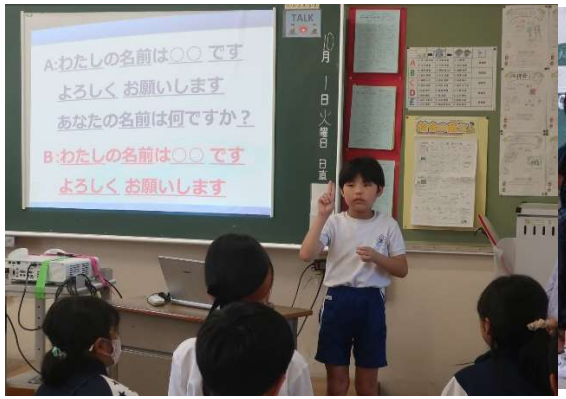
資料②

講話（聴覚障がいとは、どんな生活をおくっているのか等）
聴覚障がいについて、「見える障がい」「見えない障がい」があり、聴覚障がいは「見えない障がい」であり外からは分かりにくい。聞こえないためにいろいろな情報が入ってこない（例：一目でサザエさんの家族構成が分からなかった）などの話をします。耳がきこえない、きこえにくい人はどんな生活を送っているのか生活のお話をいただきます。講話内容のご要望を講師にお伝えください。

聴覚障がい者とのコミュニケーション方法について
聴覚障がい者＝手話と思われがちだが、「手話」以外にも「口話」「身ぶり」「空書き（そらがき）」「筆談」といった、様々なコミュニケーション方法がある。
手話以外の方法も体験してもらいます。

口話体験
言葉を発した口の形で言葉を伝え合います。
講師の口、生徒同士の口を読み取ります。写真のように口の形の似ている言葉や文章は読み取れますか？

身ぶり体験
生徒の代表に身ぶりで何かを表現してもらいます。（動物・食べ物など）
写真はブドウを表現しています。



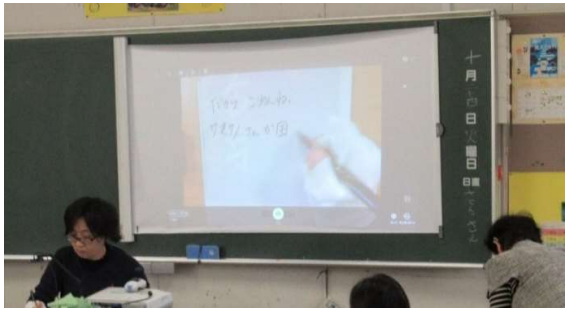
手話体験
あいさつ／数字／色の名前／自分の名前／伝言ゲームなど・・・
学校のご要望に合わせた手話体験を行います。

質疑応答
授業の最後には、時間が許す限り質疑応答の時間を設けます。手話体験に関する疑問や講話の中で気になったことがありましたら、ご質問ください。

書いて伝える体験　基本的な流れ

資料②

「講話」
聞こえにくさは千差万別です。日常生活の困った！と感じていること、またどんな工夫をしながら暮らしているのかをお話しします。きこえない(きこえにくい人)は、その人の聞こえ方に合わせて、さまざまな方法でコミュニケーションをとっています。すべてのきこえない(きこえにくい)人が手話でコミュニケーションをするわけではありません。よりよい会話のために、コミュニケーションのコツを教えます。わかりやすく伝えるため、紙芝居やクイズを使用する場合もあります。



「要約筆記・筆談についての説明」
要約筆記と筆談について説明します。よく使用する要約筆記の略語を説明する場合もあります。筆談をする場合にも役立つので、その場の他の人の話を聞いて伝えるコツを説明します。低学年児童には、自分の話を書いて伝える筆談の説明をします。

「要約筆記・筆談体験」
近くに聞こえにくい人がいるという設定で、子どもたちの身近にあふれる場面や災害時の避難所などを想定した内容の要約筆記を自席で行います。低学年の生徒は、テーマに沿った内容の要約筆記を各々の席で行います。
有志の生徒数名は教室前方の、OHCまたはタブレットを使い、皆の前で要約筆記・筆談を行います。

「まとめ」
耳マークやコミュニケーション支援ボードの紹介など、子どもたちに知っておいてほしいことを最後にお伝えします。質疑応答など。

発達障がいと自閉症についての理解　基本的な流れ

資料②

ADHDの体験が入ることがあります。
※高校の場合

授業を進める中で、話に出てきた関わり方の「よい例」「わるい例」を掲示して、目で見て分かるようにします。

講話
・はっぴいりんぐの会の紹介
・自閉症の特徴や割合などについて簡単にお話

体験①ぶかぶかの軍手をはめて、折鶴を作ろう
指先の感覚が違う人もいること、本人は一生懸命取り組んでいても、なかなかうまくできないこともあるので「急いで」「汚い」などの声掛けをすると気持ちが焦ってしまうので、「ゆっくり待つ」ということが大切だということを理解します。

体験②よく見えないペットボトルメガネを使って写真を見てみよう
視野が狭く、全体を見渡すことが苦手だとどんな風に見えるのか体験します。

体験③動物クイズを4人が同時に出題
4人が同時に違う文章を喋ったときに、誰が何を言っているのかが聞きづらい体験。周りがざわついていると、1つの音を聞くことが難しいということを分かってもらいます。

＜休憩＞
・講師の家庭で使っている自助具の見学
・授業中に軍手の体験やペットボトルの体験ができなかった子も自由に体験できます。

資料②

発達障がいと自閉症についての理解　基本的な流れ

体験④ピカピカ劇場
「ピカ」しか言葉がない世界で、言葉が伝わらないとどういう気持ちになるのか体験します。
※生徒もしくは先生に劇に協力していただきます。

体験⑥ことばを絵にしてみよう
固有名詞や形容詞をテーマに絵を描く（例：リンゴ、5個、ちゃんと、平和など・・・）
言葉には「見える言葉（絵にできる言葉）」と「見えない言葉（絵にできない言葉）」があることを体験を通して理解する。
自閉症の人には「見える言葉」でものごとを伝える、という説明をします。

体験⑤　お母さんの話
子どもが生まれた時からの生い立ちをパワーポイントや写真を通してお話します。

まとめのお話
体験を通して学んだ自閉症の方との接し方や、自閉症の子を持つ母としての思いをお話します。

※詳しい物品や数は必ず講師に確認してください。
＜主な必要物品＞
・マイク
・スピーカー
・プロジェクター
・スクリーン
・パソコン用の机といす
・長机
・ホワイトボード
・棒磁石
・講師用のいす

ダウン症についての理解　基本的な流れ

資料②

エンジェルの会について
エンジェルの会についてご紹介します。また、エンジェルの会に所属しているダウン症の子どもたちの、生まれてから現在に至るまで元気に活躍している姿についてご紹介します。
（講師の方以外に、実際に実践教室を行う学校に通っている子どもがいる一般の保護者の方にもお越しいただき、お話してもらう場合もあります。）

知的障がい、ダウン症について
障がいには聴覚障がい、視覚障がいなど色々な種類がありますが、その中で知的障がいとはどういったものか、またダウン症とはどういった障がいなのか、お話しします。

DVD鑑賞「あしたへジャンプ」（20分）
ダウン症の少年が主人公のDVDを鑑賞します。
遊び相手がおらず、一人で遊んでいるダウン症のある少年が、家族・クラスの仲間の思いやりの気持ちによって輪の中に入ることができる様になるまでのストーリーです。

ダウン症の方の特徴
書籍「ダウン症の子どもたち」に基づき、ダウン症の方の考え方や行動の特徴について、ご紹介します。ダウン症の子がどんな生活を送っているのか単純な疑問を交えてお話しします。（プールに入れるのか、車の運転はできるのか等）※講師から黄色いミニ冊子を配布します。この冊子に基づく説明になります。

親の立場からの思い
ダウン症の子を持つ母としての思いについて、子どもたちへ向けてメッセージを送ります。

【主な必要物品】
・マイク　2本（スピーカー）
・マイクスタンド
・プロジェクター
・DVDプレイヤー
・スクリーン

【当日について】
・スクリーンに投影するため、暗幕のある部屋のご用意をお願いします。
・投影資料・配布資料については、当日講師が持参します。（事前に必要な場

高齢者擬似体験　基本的な流れ

資料②

高齢者擬似体験までの事前学習
【高齢者ウォッチング】
高齢者の素敵なところ、大変なところを探してみる

導入
事前学習を踏まえた高齢者についての講話

高齢者擬似体験セットの装着方法の説明

高齢者擬似体験セットの装着
体験者・介助者のうちの１人の体験者が装着します。装着後、Ａ～Ｃの体験の中からいくつかを行います。体験後、体験者と介助者の役割を交代し、体験します。

体験

A

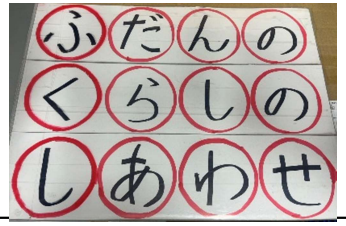
「指の動きにくさ」
【体験者】
指や手が思うように動かず、時間がかかることを体験します。
【介助者】
相手を待つこと、介助者の声掛けの大切さに気づきます。

B

「歩行」「足の曲げにくさ・上げにくさ」
【体験者】
足の曲げにくさ、上げにくさを体験します。
【介助者】
高齢者にとって、どんなサポートがあるとよいかに気づきます。

C

「見えにくさ」
【体験者】
ゴーグルをつけて、色、文字の大きさ等、見え方の違いを体験します。
【介助者】
高齢者にとって、見えにくい色、文字の大きさ等を理解し、声掛けの大切さに気づきます。



振り返り
生徒に感想や自分のできるお手伝いについて発表してもらい、それを基に、振り返りをします。（ふくしとは、高齢者から幸齢者へ、等）

全ての体験に共通すること

【体験者】	【介助者】
80歳の高齢者になりきる	思いやりをもって声掛け、介助をする

高齢者擬似体験　装具の装着について

資料②

【装着例】

a:ゴーグル、b:イヤーマフ
白く濁ったレンズの入ったゴーグルで、白内障と視野狭窄の体験をします。イヤーマフをつけ、音が聞こえにくくなる体験をします。イヤーマフと耳が直接触れないよう、タオル等をかけます。

c:手・足関節サポーター
サポーターで関節の曲がりにくさを体験します。サポーターと肌が直接触れないよう、バンダナ等をまきます。
※小学5年生以上の学生のみサポーターを使用

指の第一関節が出る程度までサポーターを装着

d:おもり、e:手袋・サポーター
手袋（薄い手袋とサポーターの2枚重ね）で指先の感覚の鈍さ、おもりで筋力の低下を体験します。

◎セット内容◎　※c,d,eは利き手側に装着

a:ゴーグル

b:イヤーマフ

c:手・足関節サポーター（大きいサイズ・小さいサイズ）

d:手(1kg)・足(1.5kg)おもり

e:手袋・サポーター